

「防災」が変わる。「防災」を変える！

前回より…命に関わる災害犠牲者は、SNSを適切に使えていない人(情報弱者)が、犠牲になっている確率が非常に高いようです。なぜ?そのようになるのかという『正しい情報の入手が遅れること』に原因があると考えられます。それらは、自らの行動に結びつく水害・土砂災害ハザードリスクが、情報共有できないことによるものだと考えられます。そこで『平成30年7月豪雨災害』を振りかえりながら考えていきましょう。

行政が策定していたハザードマップ等で想定した地域に災害が発生したことで、住民に避難を促す情報も数多く発信されてきました。にもかかわらず、結局のところ避難行動につながらなかった地域もあり、多くの被災者・犠牲者を生むことになりました。なぜか?

そこには、災害による被害発生が想定される中で、住民一人ひとりがその危険性を認識し、自分自身の命を守るための行動につながっていく「防災意識の構築」はもちろんのことですが、それとは別に情報の氾濫を引き起こしている「整理されない情報と発信元の乱立」も大きな原因となっているようです。

様々な媒体からの情報や多種多様な情報発信者を、今一度整理して一元化する必要があるのではないかと。多種多様な情報発信者は、驕り高ぶりとも思える「自分たちは役に立つ必要な情報を出しているのだ」と、少し誤った認識をしているようです。受信するものからすれば結果として「情報の混乱する状況が25年からあまり変わっていない」と感じられます。したがって、情報受信者の立場に立って考えれば『情報の一元化と発信元の単純化による分かりやすさの追求』が非常に遅れています。

情報の伝え方は、住民(当事者)に切迫性を伝えるために、住民一人ひとりが情報を「自分の事」と受けとれる内容である必要があります。そのためには、より細かな災害情報の発信(身近な情報に変換)が必要であると考えられ、住民にテレビ・ラジオ・スマホ等を通して届けることで「自分の事だ!」と認識させる必要があります。

住民にリアリティを伝える必要性から、情報の切迫感とリアリティ感を感じさせることも重要です。自分にも危機が迫っているという『災害モードへの意思を切り替える』には、心のトリガーとなる情報の発信が必要だと考えられます。地震災害に比べて、水害・土

砂災害は、平常時から災害時への変化点がゆるやかであり「今だ!」という変換点の見極めが非常に難しいのです。それ故に心のトリガー情報を前もって定義し、それを有効に発信することが必要ではないかと考えられます。住民が分かりやすく簡単に情報を得ることができ、その上で切迫感をもって自分の置かれている状況を認識し、その後の対応行動を促すために、発信者の行政・メディア・SNSを連携する災害情報入手の簡単化が必要な時といえます。

『情報弱者』に災害情報を伝える方法は、地域コミュニティを通じた情報弱者へのアプローチをどのようにすべきかを日常の中で考える必要があります。特に地域コミュニティに日頃から参画せず、更にはSNS等を使えない人たち・使わない人たちには「信用できる人が身近にいない状況」(この身近という表現は直ちに情報共有できる人の存在距離)なのです。SNSを使用できれば、電話が不通でも、インターネット網は通信できる場合が多く、更には緊急を要するときに相手の状態を気にせず発信でき、届いた情報を見たい時間に見ることができるので、ひとりぼっちではなく、相談できる相手がどんなに遠く離れていても「大切な人がいつも身近にいる!繋がっている」ということになります。例えば、過去には避難をするかどうか迷っていた人が孫からのLINEを見て『私は死なない。生き残るぞ!そして孫に再び会おうんだ!』と避難を躊躇していたが、このLINEが「心のトリガー」になり避難行動をとったという人もいます。

SNSは難しく感じられるかも知れませんが、スマホ・パソコン・タブレットが不安な人もいます。でも、あなたがそれらを少しでも使うことができたなら「あなたの世界が大きく開けるのです」。そのために加古川グリーンシティ防災会では、防災会公式LINEがあります。いつでも防災会は、あなたのお手伝いをします。「少し頑張ってみようかな」と思う人は、家族はもちろんのこと、防災会や管理事務所、あなたのご近所さんに声を掛けてみてください。きっと、あなたの見えている世界が変わります。

現在、ラグビーワールドカップが開催されています。そのラグビーに有名な言葉があります。『One for all, All for one』この言葉の正しい意味は「一人はみんなのために、みんなは一つの目的のために」防災も同じ「自分の大切な人の命を守る」トライ!

